

日本キリスト教会大阪北教会

正午礼拝 説教

2004年12月15日

『最も重要な正義』

聖書 マタイによる福音書 23 章 23～28 節 賛美歌 268 493

説教 森田幸男牧師

今年、教会では次の 19 日にクリスマス礼拝を守ります。毎年 12 月 25 日のいわゆるクリスマスの日よりも前の日曜日に、クリスマスのお祝いをするのが私達の教会の慣わしです。そして今、クリスマス・降誕節を待つ待降節の時を過ごしています。

先日来、日曜日の説教ではそのような箇所を順次読んでいて、新たに私たちが気付かされたことは、イエス・キリストが誕生なさったその頃のイスラエルは、本当に絶望的に暗い時代であったということであります。それは宗教的にも政治的にも経済的にも、すべてにおいて絶望的で、暗くて闇が支配していたそういう時代でした。そのような中にイエス・キリストが来られたのです。それはどのような光もその輝きに及ばない、本当の真の光として来られたということでありました。

私たちの今の時代は国内的にも世界的にも決して明るいとは言えず、むしろ暗いことの多い時代であります。本当にどうすれば闇が光に変わるのか。それは個人的な生活においてもまた言えることではありますが、どうしたら闇が光に変わるのか。闇の中に光が輝き出するのか。そのことを今日の聖書を通して知ることが出来ればと思います。

今日の箇所は今お読みしただけでお分かりのように、イエス・キリストが律法学者たち、これは聖書の学者で、神の教えを人々に説く人たちですがその者たちと、ファリサイ派の人々、彼らは神の教えに忠実に生きようとする宗派、ファリサイ派と呼ばれたのですが、その人たちに対して、「あなたたちは偽善者だ」とこのようにおっしゃっているのであります。前の箇所もそうですし、また次回読む箇所でも、厳しく責めておられます。

今日のところは、十分の一の献げ物をめぐって語られているのであります。イスラエルという民は、その昔エジプトで奴隷でありました。そこで本当に惨めな奴隷の生活をしていたのでありますが、神は奴隷の民・イスラエルを救い出されて、そして乳と蜜の流れる約束の地に彼らを導き入れられました。イスラエルという民は、アブラハムの孫のヤコブの子たち十二人から増え広がっていった民ですが、神の約束の地に入った時、その十二部族はくじを引いてそれぞれの土地が分与されました。しかしその中で一つの部族、レビ人の部族には土地は与えられなかったのです。勿論住む土地はあるのですが、畑になる土地は与えられなかったのです。そういう中で、このレビ族というのはどういう役割を担うかということ、専ら神様に仕える。そしてイエス様の当時では神殿で礼拝が一年 365 日ずっとささげられるわけですが、それに仕える祭司の部族がこのレビ族だったのです。当時でも 2 万人からいたのです。この人たちは所謂世俗の仕事をしません。専ら神様に仕えるということですから、この人たちの生活を支える必要があったわけです。神様は他の部族に、

収穫からその十分の一をレビ人の生活を支えるために献げることを求められたのです。

そういうことは旧約聖書に記されているのですが、その他にそれとは別に、「3年毎に十分の一を取り分けて、それを備蓄しておきなさい」ということも言われています。「それは何のためか」といって、町の中にいる寄留者、孤児、寡婦がそれを食べて満ち足りることができるようにするためである。そうすればあなたの行うすべての手の業についてあなたの神・主はあなたを祝福するであろう」と、このように申命記14章に出ているのですね。ですから、この十分の一の献げ物、また3年毎の備蓄というのは、今言ったようなことで合理的な制度、且つ福祉的な意味を持っています。外国から来てその国に宿っている寄留者たちは、いろんな面で困難が伴うわけですからそういう人、また孤児たち、寡婦たちを顧みるならば、神はあなたがたを祝福されると言われています。ですからこの十分の一の献げ物というのは、そういう意味において神様の本当に思い遣り深い掟でありました。今日でも多くの教会では十一献金といって収入の十分の一の献金を励行している教会は少なくありません。わたしが苦小牧教会にいた時にそういう教会から日基の教会に移られて来られた方があって、何十何円まできっちりと計算されて献金されている家族がありました。

当時ファリサイ派の人たちは率先してそれを励行していたわけです。彼らの徹底ぶりはここに、「薄荷、いのんど、ういきょうの十分の一は献げるが、」というのは、普通の麦とかぶどうとオリーブなどは主産物ですから当然ですが、ここに挙げられているものは香辛料とか薬草なんですね。そういう末端のものは省略して収穫とか所得の中に入れて、主なものの十分の一というのが一般的でしょうけれども、ファリサイ派の人たちは隅々に至るまでの十分の一を献げるという徹底ぶりだったのであります。それをイエス様はここで言うておられるわけです。「そのようにしておりながら、律法の中で最も重要な正義、慈悲、誠実はないがしろにしている」とこのように彼らの問題性を指摘されたわけでありました。十分の一の献げ物というのは、元来は神様の思い遣り深い掟なわけですね。ですからイエス様も、「もとより十分の一の献げ物もないがしろにしてはならない」と言うておられます。けれどもその事の本来の精神である神様の教え・律法の中でも最も重要な正義、慈悲、誠実がないがしろにされているのでは、本末転倒なのです。つまり、その十分の一の献げ物は本当に厳密に徹底的にしていながら、社会において、また対人関係において、正義、慈悲、誠実を徹底することはないがしろにしているというのが、この律法学者、ファリサイ派の人々の実情であったということでもあります。

そこでイエス様は24節で、「ものが見えない案内人、あなたたちはぶよ一匹さえもこして除くが、らくだは飲み込んで」と言われます。これはぶどう酒の醸造の話です。醸造しているぶどう酒の中にぶよが入れば、勿論それはきれいに取り除くわけでありました。それでいながら、らくだは飲み込んでいます。らくだは飲み込めるはずはないのですが、それほどこちらでは細かいところまで大事にしていながら、一番大事なところではすべてが抜けていて、ぶよはこすけれどもらくだは飲み込むようなことをしていながら、それに気付いていないということでもあります。

25節26節で言われていることも、「杯や皿の外側はきれいにする。これもまた神経質な

ぐらいいきれいにするが、あなたがたの内側は強欲と放縦で満ちている。先ず内側をきれいにせよ。そうすれば外側もきれいになる。」ここにヒントがあると思うのです。強欲とか放縦に満ちていて、外側はきれいに見えるかもしれないが、それは偽りの輝きだ。本当に内面から溢れる輝きではないということでもあります。

27 節以下を見ますと、「あなたがたの状態は白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちている。このようにあなたたちも、外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている」とこのようにおっしゃって、当時のそれこそ神の教えに忠実であると自負している律法学者、ファリサイ派の人々を手厳しく断罪されたわけでもあります。

そして他のところで申しましたように、これは教えを説く方のグループですが、祭司族のレビ族の方はどうなっているかと言えば、イエス様は、「わたしの父の家(エルサレムの神殿)はすべての人の祈りの家なのだ。ところがあなたがたはこれを強盗の巣にしてしまっている」とおっしゃいました。神殿では礼拝が作法どおりきちんとささげられていながら、その実質は強盗行為だと言われているのです。これはイスラエルの内部の状態です。イスラエルをもっと大きく支配していたのがローマ帝国です。そしてそこではイエス様がかかられた十字架というのは二つや三つではなくて、何百何千と乱立したのです。ちょっと気に入らなければ十字架刑に処するという暴虐ぶりだったのです。そして若い娘が犯されるということも日常茶飯事でした。イエス様が誕生されたベツレヘムにおいて何が起こったか。当時のヘロデ王はイエス様がそこで生まれたということを聞いたら、「ベツレヘムとその周辺の町々の2歳以下の男の子を皆殺しにせよ」と命令を出し、それを実行したと、マタイによる福音書のイエス様の誕生の記事のところに書かれています。幼児大虐殺です。そんな無残なことにも痛痒を感じない時代状況だったということでもあります。

このようにイエス様は当時の指導者層すべてに対して厳しく断罪されているのですが、顧みて、私たちのあり方はどうでしょうか。彼らは本当に熱心だったのです。それはイエス様も認めておられます。けれどもその熱心は深い知恵、知識に基づいていないということです。その熱心において我々はどうか。またその憐れみということにおいて我々はどうか。その両面においてその不徹底のそしりを免れることはできないのではないのでしょうか。とすれば、今の時代はいろんな悪いことが起こって、一体どうなっているのだと私たちも慨嘆することがあるわけですが、誰がそうしているのか。そう慨嘆しているあなたに責任はないかと、私たちは問われるし、自問しなければならぬのではないのでしょうか。

今日、経済格差という言葉が聞かれると思うのです。わたしがブラジルに行った時に、私たちがホームステイした家では、掃除婦の女性は月5千円ぐらいで雇われ、その他に洗濯婦、ご飯を作る食事婦を雇っていました。ブラジルは今でもそういうことなんです。これはインドネシアの話ですが、日本の会社が現地にいるんな会社を興してそこに社員が駐在しますね。3,4人がレストランで食事をして支払う代金は、現地の工場労働者の一か月分の収入に当たるということです。それぐらい差があるのです。これは最近の11月20日の記事ですが、アフリカの中央部にコンゴという国があります。そこに今国連監視団が行っ

ているのですが、その兵士がビスケット一枚で現地の女性に関係を強要するというようなことが頻発しているということです。ビスケット一枚で体を奪うのです。経済格差というのはそれくらいあるということです。それが現代の事情です。一方で桁違いに高価な爆弾を大量に落として人を殺す。この開きというのは天と地ぐらい違うと言ってもいいわけです。そういうことが時代を暗くしているのだと思います。

マタイによる福音書 15 章 32 節以下によりますと、イエス様が七つのパンで四千人の人を養ったという話が出ています。それは女性と子供を除いて四千人の人が、弟子が持っていたパン七つを分けて食べて満足したという話です。これは今日のビスケット一枚のために体を犠牲にするということと考え合わせて、パン七つで女性と子供をいれたら四千人の三、四倍になるでしょうけれども、その中には食べ物を少し持っていた人もいたかもしれませんが、少しでもそれを分けて食べたということであるならば、そういうことが人々の心をどんなに満たす出来事であったかということが想像できると思います。だからそこには本当に飢えもあったでしょう。闇もあったでしょう。いろんな問題があったでしょうけれども、そこでは厚く覆っていた雲が裂けて、人々のところに光が輝き照ったのではないのでしょうか。そこにあったのは貧しい人への思いやり、またそういう者への痛みの共有というものが闇を光に変えたのではないのでしょうか。

聖書を二箇所読んで終わりにしたいと思います。旧約聖書イザヤ書 58 章 9 ~ 11 節、「あなたが呼べば主は答え / あなたが叫べば / 『わたしはここにいる』と言われる。 / くびきを負わずこと、うしろ指をさすこと / 呪いの言葉をはくことを / あなたの中から取り去るなら / 飢えている人に心を配り / 苦しめられている人の願いを満たすなら / あなたの光は、闇の中に輝き出で / あなたを包む闇は、真昼のようになる。 / 主は常にあなたを導き / 焼けつく地でああなたの渴きをいやし / 骨に力を与えてくださる。 / あなたは潤された園、水の涸れない泉となる。」

もう一箇所、ミカ書 6 章 6 ~ 8 節、「何をもって、私は主の御前に出で / いと高き神にぬかずくべきか。 / 焼き尽くす献げ物として / 当歳の子牛をもって御前に出るべきか。 / 主は喜ばれるだろうか。 / 幾千の雄羊、幾万の油の流れを。 / わが咎を償うために長子を / 自分の罪のために胎の実をささげるべきか。 / 人よ、何が善であり / 主が何を御前に求めておられるかは / お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し / へりくだって神と共に歩むこと、これである。」

正にイエス様はこの神様の御心を体現なさったのです。それがクリスマスということでもあります。

お祈りいたします。

神様。どうか私たちが自らを御言葉に照らされて省み、あなたの真の教えへと立ち返ることができるよう導いてください。そしてどうか、闇を光に変えてください。

この祈り、イエス様の御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン